

比較思想学会の思い出——感激の創立大会——

島 田 燐 子

創立大会の感激

二〇二三年に比較思想学会が創立五〇周年を迎えるのは誠に喜ばしく心からお慶び申し上げたい。一つの学会が五〇年間も存続するのは大変なことで感慨深い。懐かしい先輩諸氏や先生方のお顔が浮かび私はいま様々なことを思い出している。多くの方がすでに鬼籍に入られておられるのがなんとも残念だが、大学院のゼミの先輩の峰島旭雄先生のお勧めで参加した私には本当に有り難い学会であつたとあらためて感謝の気持ちでいっぱいである。

なんといつても印象が強烈なのは当時三七歳の私が一会員として出席した一九七四（昭和四九）年六月八日の創立大会で、あの日の胸のときめきが今も甦る。世話人の先生方が一月の設立準備会から半年をかけて尽力された結果、二〇〇人を超す人が大正大学に集まったこともあつたが、それにもまして次々と登壇される先生方の話されたことが素晴らしくて印象に残つたのであつた。

午前の部は白木淑夫大正大学教授の司会で始まった。梶芳光運教授の開会の挨拶の後、会長の中村元先生の講演「比較思想の未来性」と早稲田大学教授の松浪信三郎先生の「私のなかの比較思想」があつたのだが、この両方ともじつに内容豊かで理解しやすく心に残る名講演であつたのだ。

中村元先生の挨拶講演「比較思想研究の未来性」

少し内容を紹介する。「比較思想研究」創刊号を参照して要旨をまとめた。先生は「この際このような動きが出てきた由来と将来への見通しということについて一言述べることしたい」と前置きされて講演に入られた。まず、我が国の大きな問題は思想の混乱である。学問が過去の優れた思想文献の紹介羅列に終わっているからではないか。多くの大学で哲学は「西洋哲学」「インド哲学」「中国哲学」と分けられ日本人でありながら日本の思想史に関する学科とか講座が設けられてないのが実情である。なぜそう

なったかについて先生は權威至上主義をあげられた。事大主義と自らの領域を守ろうとするセクト主義が特に災いしている。日本では哲学といえばヨーロッパ哲学だけを指すが今や、バートラン・ラッセルさえ哲学は西洋だけでなく東洋にもあることを強調している。グローバルに考える必要があるとはっきり明言しているのがポール・ドイッセンであり、人類思想史というものを全体的に見なければならぬとしている。比較哲学という言葉を使ったのはフランスのマッソン・ウルセルでイタリヤ、ドイツ、ロシア、そしてインドで比較哲学が使われ、特にアメリカで比較哲学の研究が盛んになり、ハワイ、ホノルルでの東西哲学者会議は五回開催されている。日本はというと、比較思想は古くは弘法大師の『三教指帰』に始まり富永仲基や松宮観山も注目すべきなのだ。比較を行うのはそれを通路として新しい思想をつくりあげることが大切で、各個人の主體的な問題意識の内に組み入れられて活かされなくてはならない。そして、グローバルな見方が今後ますます必要になってくることを言われ、若い人に期待したいと結ばれた。松浪信三郎先生はパスカルの研究他フランス哲学で有名な教授であつたが実に幅広く勉強されておられ、パスカルの「人間は中間者」を座として比較思想の可能性を語られ印象深かつた。

午後の部は川田熊太郎先生が座長をつとめられてのシンポジウム「比較思想方法論」で、末木剛博教授、片山正直教授、松尾宝作博士という個性的な三人の熱弁の展開となつた。五時半ころから総会が開かれ峰島先生が説明役で会費、会則、機関誌、研究例会等々を説明され、開かれた学会を強調された。

当時、七〇年代も半ばで、我が国の社会もだいぶ落ち着き高度経済成長期にはいり、大学も六〇年代終りから吹き荒れた大学闘争も収まりつつあるいい時期に学会が旗揚げできたことを多くの人が喜ばしく思っていた。少し前まで全共闘による闘争は伝染病のように全国の大学に広がり教員は対応に追われて研究どころでない時期もあつたのである。しかし大学の改革はなかなか進まず古い体質が残っていた。したがって、中村先生がこの日の講演で大学や学会の權威主義とセクシヨナリズムの批判をされたのを、「良く言ってくださつた」と受け止めた人が多かったと思う。新しい学会の誕生を喜ぶ声が満ちていたといつてよい。

開かれた学会

学会には様々な分野の人が集まつた。半年の準備期間の間に世話役の先生方が積極的に勧誘をされたことも大きかつたが、後で伺つたところでは研究仲間であつた中村先生、川田先生、末木先生、峰島先生方に加えて、金沢の松尾宝作博士の熱心な働きかけがあつたからだそうである。金沢で医院を経営する傍ら同地で文化講演会を開催し、東京から中村先生方を招かれて活動をされて、金沢大学に教育社会センターという大学開放講座を寄付され、既存の学会に比較思想研究部会の設置を強く要請されて運動されたがうまくいかなかったところへ本学会設置が持ち上がり、松尾先生は多くのお仲間と共に参加されたというのを伺つた。したがって、中村先生も峰島先生も松尾先生を大切にされておられた。在野の研究者も歓迎したいと会費も他より低く抑えられたそうで初

年度は五〇〇円としたが、次年度からは一〇〇〇円とするとされ、苦心が偲ばれたのだった。学会誌『比較思想研究』の刊行を宣言

され、事実二月に刊行されており、私はその第一号の会報を参照しながら本稿を書いている。大切なのは「趣意書」であろう。峰島先生が原案を書かれたと伺った事があるがおそらく様々な意見を取り入れてまとめたと思われる。「学問の諸分野で学際研究が顕著になっていること、比較思想は特に世界思想的意義と必要性が大きいので各研究者が緊密な連携を保って共通の広場を持つ事にする」といった趣旨で三六人の方が発起人になっておられる。現在では伊東俊太郎先生しかお会いする機会がない。中村元先生が会長で、登壇者も国立大学、私立大学のバランスを考え、事務局を大正大学に置くこととされ、峰島先生が局長を務められたのである。当学会の発展のためには峰島先生の奮闘が大きく、共に働かれた大正大学の先生方には大変なご負担であったと拝察するが、会の維持発展に資するところ大であったと思う。

学としての比較思想を目指す以上大切なのは「方法論」である。創立大会のシンポジウムのテーマでもあったのだが、研究例会が開かれ、第二回の一九七四年（昭和四九年）一月五日には創立大会シンポジウム批評会と銘打って福井文雅早大教授、田丸徳善東大助教授、峰島早大教授が登壇した。若手の先生方による活気ある論争で印象に残っている。

研究例会を各地方地区で開催することを奨励し責任者をお願いして行ってきた。発表論文を『比較思想研究』に掲載することも行ってきた、幅広い参加を工夫してきている。

女性会員の活躍

近年、思想系の学会に女性会員が増えつつあると感じる。比較思想学会はどうであったであろうか。他の思想系の学会に比べると女性の割合は多く、理事・評議員一〇八名中女性は一名。学会が設けた若手研究者への研究奨励賞も三一回中七回女性会員が受賞している。お名前をあげさせていたたく。

頼住光子氏（第二回、八九年）、吉田喜久子氏（第三回）、田中の子氏（第二回）、千田智子氏（第五回）、橋杢氏（第七回）、今村純子氏（第一八回）、岩脇リーベル豊美氏（第二三回）（三一回中四回は該当者なしなので二七名が受賞者）

頼住氏は第一〇代の会長に選出され、困難な時期を丁寧に会の運営に取り組まれて二〇二〇年の会長選挙では再任された。国際連携が当たり前の時代のかじ取りは容易でない。新型コロナウイルス感染症のため会議もオンラインで行い大変なことでと拝察するが頑張っておられる。ただし、会員の女性が専任職を得るのは極めて難しいことは変わっていない。

グローバルな時代でこれまでも増して海外で日本思想を発信することが大切だが、それを見事にやられているのが橋杢（はしひさき）氏である。氏はウィーン大学哲学科でハビリタツイオン教授資格で教鞭をとられながらウィーン比較思想・学際研究協会（KdI）を設立し、毎年さかんに学会を開催されている。また、著書『現代に生きる道元―正法眼蔵』（ドイッ語）を刊行されワルシャワのポーランド国立学術院総合哲学科からも招かれ客員招

聘教授として英語での講義をされている。氏の門下から学位を取得してヨーロッパの学会で活動をされている人材もおられると聞く。貴重な存在である。

女性会員で理事を務められた羽生佐和子氏は二〇二〇年三月まで国会図書館長という要職につかれていた。

私の場合は大学院修了後、短期大学の教員をしていた時に峰島先生が主催された勉強会への参加を勧められて西田幾多郎の主要作品を読むことから縁をいただいた。先生の凄じところはそのあとには適任者を選び『東洋の論理―西田幾多郎の世界』（北樹出版、一九八四）といった書物を制作するという果実を残されることで、教授クラスから若手まで様々なテーマで広範に勉強をしたのであった。『比較思想辞典』（東京書籍、二〇〇〇）まで度々機会をいただいた。この時代に東儀道子氏や小田川方子氏とも友人になった。私はというとその後大学の仕事で忙しく研究も倫理学が主で、例会発表一回で比較思想の研究活動は十分でなくて申し訳なかったが、やれることは一生懸命やる主義で過ごした。いつの間にか評議員、理事に任命されて、査読、書評、奨励賞選考委員、編集委員等を動めた。学会開催も二五周年記念の第二五回大会を引き受け、文京女子大学時代であったので「東西における男女論」をテーマにさせていただいた。小田島雄志教授の「シェクスピアの女性像」の講演も異色で懐かしい。

学会開催といえば本学会は大学だけを開催場所とせず、開かれた学会にとの中村先生の方針で、第八回は新潟県佐渡、第一四回は島根県隠岐、第一七回は香川県坂出、第二六回富山県宇奈月と

地元の皆様にお世話になり、近年では二〇一四年の第四一回は島根県松江市の中村元記念館で開催され、二〇一九年の第四六回は石川県かほく市の西田幾多郎記念哲学館でと視野を広げ、学会に新風を入れる努力をされてきている。事務局はさぞ大変であったと思うが、参加者としては楽しかったことが数々思い出されるし、岡山、信州と地方支部の先生方がご案内くださったこともかけがえのないよい思い出となっている。

さて、最後に、設立以来五〇年を迎えようとしている比較思想学会は果たして設立当初の目標を達成しつつあるのかを問わなくてはならないであろう。垣根を取り払って交流し新しい研究を進めるといふことはいかがかという、かなり進んできているようだ。では、中村元先生が力を入れておられた世界哲学史という比較思想による思想史という、これはトレンドになってきている。文化、文明、思想といった人の営みをグローバルに考え直す傾向が強まっている。二〇一九年二月三〇日には「世界哲学の可能性」の報告会が日本学術会議講堂で開かれ、本学会から末木文美土理事、気多雅子理事が研究発表をされた。二〇二〇年の本年久し振りに『世界哲学史』（ちくま書房）が納富信留教授、中島隆博教授（本学会理事）らの尽力で新書版八巻の体裁で刊行され百人の執筆者が協力をされた。「COVID-19」といわれるコロナ禍の世界的流行によるせいもあるが、私たちはようやく地球全体の人類という観点から「いのち」の自然との闘争と共生を振り返り、未来のために協力しなくてはと気が付いたところである。

（しまだ・あきこ、倫理思想、比較思想学会理事、文京学園長）